



日本統計学会 会報 2015.10.30 No. 165

発行—— 一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
(公財) 統計情報開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任—中野 純司 (理事長) / 酒折 文武 (庶務理事)
森 裕一 (広報理事) / 久保田 貴文 (広報委員)
西莖 晴久 (広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

- | | |
|---|--|
| 1. 巻頭随筆…………… 垂水共之… 1 | 4. 第10回日本統計学会春季集会のお知らせ(第一報)
…………… 中野純司・青木 敏・田中研太郎・
二宮嘉行・照井伸彦… 16 |
| 2. 統計学会各賞受賞者のことば | 5. 統計検定 RSS/JSS 試験 最優秀成績賞の授与について
…………… 岩崎 学… 17 |
| 2.1 第20回日本統計学会賞受賞のことば
…………… 久保川達也… 3
…………… 美添泰人… 4 | 6. RSS/JSS 試験 (2015年5月実施) 合格者
…………… 中野純司… 17 |
| 2.2 第11回日本統計学会統計教育賞受賞のことば
…………… 独立行政法人統計センターにおける
教育用擬似マイクロデータの開発チーム… 6
…………… 峰野宏祐… 7 | 7. 2015年6月統計検定の成績優秀者
…………… 中野純司… 18 |
| 2.3 第9回日本統計学会研究業績賞受賞のことば
…………… 加藤昇吾… 8
…………… 黒住英司… 10 | 8. 統計検定合格者の声…………… 岩崎 学… 19 |
| 2.4 第8回日本統計学会出版賞受賞のことば
…………… 金 明哲… 11 | 9. 理事会・委員会報告 (2015年7月18日開催) … 21 |
| 2.5 第29回日本統計学会小川研究奨励賞受賞のことば
…………… 平野敏弘… 12 | 10. 2015年役員・代議員協議会記録
…………… 酒折文武・間野修平… 22 |
| 3. 2015年度統計関連学会連合大会の報告
…………… 坂本 亘・栗原考次・山口和範… 13 | 11. 研究部会新設公募…………… 中野純司… 23 |
| | 12. 修士論文の紹介…………… 23 |
| | 13. 新刊紹介…………… 24 |
| | 14. 学会事務局から…………… 24 |
| | 15. 投稿のお願い…………… 24 |

1. 巻頭随筆：統計屋とプログラミング

垂水 共之 (岡山大学名誉教授)

昔々(「10年ひと昔」という意味では20年前)ないしは昔々のその昔(3個で30年前)データを分析しようとする手計算や電卓で計算できるのは高々10次元(変数)程度、それ以上となると「電子計算機」というものを使うほかなかった。当時の「電子計算機」は恥ずかしがりやの箱入り娘(息子?)で冷房の効いた奥まった部屋に鎮座ましてあり、庶民が顔を見ることはできなかった。さらにその恩恵にこうむるためには「プログラミ

ング」という難所をクリアしなければならなかった。プログラムが得意でない人は誰かに頼むか、書籍に載っているプログラムを丸写しで紙カードにパンチして、バッチ処理に出し、翌日に戻ってくる計算機の打ち出したエラーメッセージの処理に悪戦苦闘していた。60年代中ごろにはBMDのようなプログラム集が無償に近い形で提供されていたが、計算機のメーカーが異なると、いくらかの手直しも必要で、その知識がない者には手の出

しようがなかった。

国内では三宅一郎（1973）氏が中心となり、SPSS が京都大学で、1976年にはすべての全国共同利用大型計算機センター（7ヶ所）で動くようになり、その有用性が多くの人に理解された。データは持っているがプログラミングに悩まされていた人たちに歓迎された。なお、SAS もすでにあったが1970年代は IBM 社の future system に対抗して、国内の計算機メーカー 6 社が通産省の指導のもと 3 グループに結集して対抗機種の開発に盛を出していた時代であり、IBM 機でしか動かない SAS が使える大学関係者は少なかった。国立の大学・研究所が外国製の計算機を買う（レンタルする）とすると、国産機種ではダメな理由書を書かされた時代である。

ソフトはハードのおまけ（バンドリング）だった時代であり、国産メーカーではソフトの品揃えとして統計解析ソフトもリストに乗せる必要から、どう見ても BMD と思われるソフトを自社ブランド名で提供している処もあった。次第にソフトがアンバンドリングされ有償化されるにつれ、一般的なソフトは廃れていった。

大学関係者が技術計算に用いる大型汎用機では、各種言語コンパイラ（圧倒的に Fortran）およびそれに付随するリンカー、プログラムのエディターがあれば用が足せた時代である。アプリケーションソフトの出番はほとんどなかった。もちろん特定分野で利用されるアプリケーションソフトは多々あったが、特定分野であるがために利用者も増えず、利用頻度も全体からみれば微々たるものであった。

そういう時代にデータ解析用の統計ソフトは、それまでの計算機センターの利用者とは異なる研究者を呼び込むことになった。プログラミングに苦手意識がある文系の研究者である。

汎用機から WS (UNIX), パソコン (MS-Windows) へ

1980年代半ばに東京大学の共同利用大型計算機センターで汎用機のほかに（おまけ的に？）UNIX 機（VAX ?）が導入され、言語「S」も共

同利用に供された。ターミナルはテレタイプ（TTY）だったので、散布図、ヒストグラム等のグラフもタイプライターの文字の組み合わせで印刷されるため、リアルタイムに表示されるわけではなく、新しいグラフィック頁（画面）に切り替えるときに、それまでバッファに溜め込んでいた図が表示されるというバッチ的な処理であった。それでもターミナルから使える S は便利であった。

1980年前後に BASIC を搭載した 8 ビットパソコンが登場するが、外部記憶としてはカセットテープが主流であり、大事なデータを保存する媒体としては心もとなかった。データ解析のためには 16 ビットパソコンでフロッピーディスクが標準となる 80 年代中頃まで待つことになる。CP-M/86, MS-DOS 等の汎用 OS も動き始め、MS-Windows の最初のバージョン 1.0 も 85 年に提供されている。

1995 年の Windows 95 の発表とともに、DOS の時代が終わり、Windows の幕が開いた。汎用大型計算機で動いていた多数の統計ソフトが Windows でも動くようになり、大型汎用計算機時代、パソコン DOS 時代にはコマンドを勉強しなければ使えなかった統計ソフトがマウス操作だけでデータ分析ができる時代が到来した。「プログラミング言語」を知らなくても、「統計ソフトのコマンド」を知らなくてもデータ解析が行える時代となった。もとよりプログラミングができれば、統計ソフトで提供されていない分析法もプログラムを書いて行うことができるし、統計ソフトのコマンドを知っていればマウス操作で回りくどい処理をしなくてもスマートに、能率よく行うことも可能となる場面は多い。知識は無駄にはならない。

スマート国勢調査

2015 年 10 月の国勢調査では「スマート国勢調査」として、調査用紙の配布の前にインターネット（スマートフォン）での回答期間が設定された。5 千数百万世帯のうち、2 割、1 千万世帯のネット回答が期待され、その達成を疑問視するサイトも多々あったが、9 月 10 日から 9 月 20 日までの回答期間に 19,175,769 世帯からの回答が集まったよ

うである。精査すれば中には不十分な回答もあるかもしれないが、それを省いても目標の1千万世帯は軽く超えている。インターネットによるビッグ調査時代の到来である。ビッグデータから目をそらすわけにはいかない。統計屋はますます忙しくなりそうである。

三宅一郎 (1973) 「社会科学における統計パッケージ」東京経済新報社。

水野欽司・大隅昇 (1978) 「統計パッケージ」①～⑦, bit, Vol.10.No.8～.

Becker, R.A. and Chambers, J.M. (1984), *S: An Interactive Environment for Data Analysis and Graphics*, Wadsworth, Belmont, CA (渋谷政昭, 柴田里程訳 (1987), 「S システム I, II」共立出版).

スマート国勢調査キャンペーンサイト, <http://kokusei2015.stat.go.jp/>

2. 日本統計学会各賞の受賞のことば

9月8日, 統計関連学会連合大会において, 日本統計学会各賞の表彰式がありました。ここに, 受賞者のみなさまから, 受賞のことばをいただきましたので, 以下の順にご紹介させていただきます (略歴・受賞理由などは, 前号をご覧ください)。

- ・第20回日本統計学会賞：久保川達也氏, 美添泰人氏
- ・第11回日本統計学会統計教育賞：独立行政法人統計センターにおける教育用擬似マイクロデータの開発チーム (代表：山口 幸三氏), 峰野宏祐氏
- ・第9回日本統計学会研究業績賞：加藤昇吾氏, 黒住英司氏
- ・第8回日本統計学会出版賞：共同受賞者である金明哲氏と共立出版を代表して金明哲氏



日本統計学会各賞等受賞者と岩崎会長, 中野理事長

- ・第29回日本統計学会小川研究奨励賞：平野敏弘氏

2.1 第20回日本統計学会賞受賞 受賞のことば

久保川 達也 (東京大学)

このたびは日本統計学会賞を頂き大変光栄に存じます。推薦して下さった先生方, 同僚並びにお世話になった先生方に心より感謝申し上げます。特に, 学部・大学院時代に大変お世話になった指導教授の杉浦成昭先生に深く感謝致します。

私の大学院時代は, 研究成果が出ず, 焦りを感じながらもがいているという, 苦悩の多い日々でした。そうした中で出会ったのが, Stein の縮小推定に関する論文です。当時この分野には多くの研究者が参入し面白いアイデアに溢れ, 研究の方向性について多くのことを学ぶことができました。共通平均の許容的ミニマックス推定量の構成もそこからヒントを得たもので, 成功したときの感動は研究の醍醐味としてその後の研究活動の原点になりました。その結果が学位論文となり, また *Ann. Statist.* (1987) に掲載されたことは2重の喜びでした。大学院時代に模索しながら道を開いた経験は, 大学院生を育てるという逆の立場になったとき役立ってくると実感しています。

その後, Carleton 大学での A.K.Md.E. Saleh 先生との共同研究, そこで知り合った C.P. Robert

氏の自由闊達な姿, Statistics Canada で政府統計に関わり現場のニーズに動機づけられた研究を展開する J.N.K Rao 先生の研究姿勢など, 大きな刺激になりました. その頃から20年に亘ってほぼ毎年 Toronto 大学を訪問, M.S. Srivastava 先生との共同論文も20本が雑誌に掲載されました. 多変量解析の高次元問題への取り組みも70歳少し前頃から始めた研究であり, 今でも日本の若い研究者を何人も迎え, 78歳でなお現役の心意気で取り組む姿には感心させられます.

2001年9月の同時多発テロの直後に渡米し, Rutgers 大学, Georgia 大学, Florida 大学, Duke 大学と約3ヶ月訪問・滞在する機会をもちました. Strawderman 先生の面倒見の良さは格別で, 今は亡き奥様と3人で海岸沿いの彼のコテージに泊まり, 昼下がりの大西洋を数時間一緒に眺めていた平和な時間は, テロ後の米国を一人旅する不安な気持ちを癒やしてくれた忘れられない思い出です. この時の訪問で Datta 教授と小地域推定に関して共同研究を始めましたが, その後何の連絡もないまま9年経て突然 revise の連絡があったのには驚きました. 結局10年の時を経てスペインの雑誌 TEST に掲載されました.

縮小推定の面白さは, 理論の美しさにあります. 1, 2次元での許容性と3次元以上での非許容性という Stein 現象, それとランダム・ウォークの再帰性との関係, そのことを明解に説明した M. Eaton 教授の美しい理論, 許容性・非許容性に関する L.D. Brown 教授の強力な条件式, 点推定と予測分布の予測問題とを結びつける完璧な関係式など, その美しさは, 何か自分でも surprising な結果を出したいという野心を駆り立てます. 改良する推定量のクラスを構成するための統一的なアプローチを Ann. Statist. (1994) で提案しましたが, その内容を統計輪講で発表したところ竹内啓先生から数日後メモを頂きました. そこには, 提案方法が, 2つのリスクの差を積分表現するという, 実にすっきりした形に書き直されていました. その美しさに感動するとともに竹内先生の凄さを実感した瞬間でした. その後, この方法は制約され

た母数の推定など様々な問題で活躍することになります.

一方, 統計的決定理論の枠組みから飛び出してみると, 縮小推定が様々な応用問題で役立つことがわかります. 官庁統計で必要度が高まってきている「小地域推定」や金融データ・ゲノムデータの「高次元解析」では, 縮小推定の考え方が大事になります. こうした分野では, それぞれの現場からの要請に応じて新たな手法の開発が求められ, それが新たな研究テーマを生み出しています.

かつて, 広報委員をしていたとき, 「統計学の現状と今後」という企画を提案し実現しました. 私の意図は, 統計学が様々な分野で役立っていることを沢山紹介してもらい, その上で現状の課題と今後の展望を語ってもらうことでした. それは, 計数工学科時代, 広津千尋先生の論文に接し, データを読み解く統計の力と面白さを知り, 統計が「生きている」ことを感じたことにあります. これからは, そうした統計の力と面白さに魅せられる若い統計家を育てることに尽力していきたいと思えます.

受賞のことば

美添 泰人 (青山学院大学)

日本統計学会賞の連絡を受けて, この賞にふさわしい貢献をしてきたのだろうか, 学生時代からの記憶をたどることになりました. しばらく考えて, 経済統計を中心にして, 統計を作成する過程に関わる充実した環境を与えられてきたことに思い当たりました. この機会に, 経済統計の分野の魅力を紹介することにします. 若い年代の研究者に関心を持って貰えれば幸いです.

私が学部学生だった頃, 大学の経済学部では「経済統計」は必ず配置する科目だったと思います. しかしそこで教えられる内容は, 多くの場合, 一般的な初級・中級程度の統計学で, 応用例に経済・経営の分野が含まれても, 統計データに踏み込んだ解説はありません. 例外として, 溝口敏行先生 (当時一橋大学教授) が執筆した経済統計の解説と, 日経新聞社が編集した実務家向けの経済

統計解説書が貴重な情報源となっていました。学部では宮澤光一先生の下でベイズ統計、計量経済分析、ゲーム理論（いずれも、宮澤先生が最初に日本に持ち込んだ分野です）を学んだ後、1970年に大学院に進学して履修した、林周二先生・中村隆英先生が共同して担当する「社会統計・統計制度論」という科目は衝撃的でした。両先生は、理論だけを勉強したのでは統計を理解したことにはならないとして、実際に各機関から統計作成の担当者呼んで調査の企画・設計から、実査の段階で生じる問題とその対応を詳細に語らせるという場を提供していたのです。一般に入手できる分厚い報告書をいくら読んでも書いていないような事情を知って、それまでの浅い理解との格差に愕然とする報告も少なくありませんでした。

それが如何に貴重な経験だったかを理解できるまでに、10年以上かかりました。作曲家のR. シューマンが「音楽と音楽家」という本の中である曲を分析してみせた際、楽曲分析の手法に触れて「知らない人には意味が分からない。知っている人には当然である。この解説が役に立つような読者は限られている」という趣旨の補足をしていましたが、経済統計の詳細についても同じことが言えると、一人で納得したものです。どの統計でもそうですが、特に経済統計では、その作成過程を詳細に理解しなければ適切な分析は不可能です。そして、さまざまな統計に関して少しずつ知識を蓄えた後に、ようやく「それらしい」分析ができるようになることを実感し続けています。

どのような基礎訓練が役に立ったかも、少し記してみます。当然ですが、学部から大学院にかけては、基本的な教科書や古典的な論文を読むことで広い視野が身についたと思います。その過程では米国から帰国した竹内啓先生にお世話になりました。ハーバードに留学する機会が与えられたときには、J.W. Pratt からベイズ統計の指導を受けながら、当時、客員教授だった P.J. Huber による頑健統計学のセミナーに出て、その内容を楽しむことができたのは、最初の訓練のおかげと感謝しています。Huber のセミナーは開講時には30人程

度の受講者がいたのが最終的に筆者と Paul Rosenbaum という友人だけが生き残った（と Paul がいつも話していたと彼の girl friend が笑う）ほどの充実した時間でした。

経済統計の理解と分析にはベイズ統計、頑健性、EDA などが基本的な視点であると考えています。標本調査論と探索的データ解析を集中して学んだことも、大きな財産になりました。前者は定年で退職したばかりの W.G. Cochran が、直前に出版された Sampling Techniques (3rd ed.) を読むのを個人的に指導してくれたのに対して、後者は当時 Dept. of Statistics の Chairman だった Fred Mosteller から学んだもので、データ解析の Work Shop には、プリンストンから J.W. Tukey がよく来ていました。今、考えてみても、数理と応用のバランスが取れた優れたカリキュラムであり、教授陣だったと思います。

その後、経済企画庁における世界経済モデルの推定作業に関わらせて貰いながら、関連する各種統計の作成をお手伝いする機会にも恵まれました。財務省では大蔵省の時代から研究に参加させて貰えた法人企業統計と、政府統計を整理統合して合理化と精度の向上に協力できた財務省景気予測調査は、それなりの思い入れがあります。大蔵省で予算がないときには、標本調査の精度計算を担当したこともありましたが、標本設計の検討にも参加してきました。総理府・総務庁・総務省と変わる時代を通じて、統計局ではさまざまな統計に触れる機会が与えられました。大学院生のときにお手伝いした、石油危機の時代における「消費者物価指数に関する意識調査」では消費者の実感がどのように形成されるかを分析しました。それから40年以上、官庁統計・公的統計に関わって、毎回のように新しい発見を通じて刺激を受けています。私に関わってきた統計審議会や各省統計作成機関との共同作業では、教えるより教わる方が多かったようにも感じています。

今回の賞に推薦していただいたのは、以上の活動の多くの機会で行った方や、学生時代に教えを受けた先生方であると知って、恐縮し

ています。一人で実現した仕事というより、共同で公的統計の改善に取り組んできたことが、今回の受賞の理由ですので、これからも経済統計分野の面白さを伝えながら一緒に考えていきたいと思っています。

最後になりますが、学会賞の創設は私が理事長に就任するにあたって引き継いだ課題のひとつです。それ以前に行われていた検討を反映して、理論と応用に大きく分けて、学会の活性化を目的としたものでした。幸いにして、その後も、基本的な性格を保ったまま、今日に至っています。創設の時にはまだ40代だったこともあって、私自身が受賞する年齢になることは想像できませんでした。名誉ある賞として、その評価を傷つけることがないように心がけることにします。日本統計学会の一層の発展を祈りながら、お礼の言葉といたします。

2.2 第11回日本統計学会統計教育賞受賞のことは

独立行政法人統計センターにおける教育用擬似マイクロデータの開発チーム（山口幸三、伊藤伸介、秋山裕美、星野なおみ、後藤武彦）

この度、「教育用擬似マイクロデータ」の開発および提供活動に対しまして、独立行政法人統計センターの開発チームが、第11回日本統計学会統計教育賞を頂きましたこと、誠にありがとうございます。統計センターの開発メンバーおよびセンター職員一同大変光栄に思っております。

今回の開発チームの受賞は、多くの方々のご協力、ご支援のおかげであります。まず何よりも、統計センターにマイクロデータ利用に係る提供業務を委託していただいた総務省統計局のご厚意がなくては始めることもできない活動でした。また、統計センターの「教育用擬似マイクロデータ」の提供について、ご理解いただき、ご利用いただきました大学等の教育者の方々のご教育活動実績がなくては、受賞はなかったと思っております。この場をお借りしまして、総務省統計局および利用者の皆様に深く感謝申し上げます。

統計センターは、統計法が平成19年に全部改正され、平成21年に全面施行になってから、公的統計のマイクロデータの利用に係るサービス（二次的利用）の効率的かつ効果的な実施を支援する観点から、統計調査を実施する行政機関等からの委託を受けて、調査票情報（個票データ）の保管・蓄積、匿名データの作成・提供およびオーダーメイド集計の業務サービスを提供しています。

統計法の改正は、「行政のための統計」から「社会の情報基盤の統計」へ転換するものであり、改正された統計法（新統計法）では、公的統計の利用を促進するために、統計データの二次的利用に関する制度が設けられています。その制度の下で、学術研究や高等教育の発展に資する場合には、匿名データを提供することができることになっています。匿名データの提供目的の1つに高等教育が入っているものの、匿名データでは、新統計法に規定されている利用目的や利用環境の制約を受けざるを得ないため、多数の学生を対象とした大学等での講義や演習などでの利用は、現実問題として困難な状況にあります。そのために、統計法令の制約を受けることなく、大学等の教育機関における講義や演習で利用可能な「教育用擬似マイクロデータ」を開発・提供することを計画いたしました。

平成16年全国消費実態調査を対象に、その個票データから作成した高次元のクロス集計表を基に、個票データに近似した擬似マイクロデータ、すなわち「教育用擬似マイクロデータ」を作成しました。この擬似マイクロデータは、個票データではないため、使用に際して制約を受けることなく、それでいて、実証分析に利用した際に、我が国の経済社会の実態を反映できるように、つまり個票データの分布にできる限り近似するように工夫して作成する、という方針で開発いたしました。その作成においては、高次元のクロス集計表の各セルの量的属性値が多変量（対数）正規分布に従うことを仮定して、多変量（対数）正規乱数を生成する統計的な手法を取っています。

作成しました「教育用擬似マイクロデータ」は、

平成23年8月25日から試行提供を開始しました。その後、これを改良した「擬似マイクロデータ」を、平成24年8月31日から提供を開始しました。平成27年7月末現在の提供状況は、延べ146件に提供し、その利用人数は1,658人に及んでいます。この取組みが、教育者の方々にご理解いただいて、実証分析の有効なツールとして、一定の役割を担っているものと思っています。

マイクロデータを用いた実証研究を進展させ、学術研究水準を向上させるためには、マイクロデータを用いた実証分析ができる人材の拡大または育成することが重要であると思っています。学生や若手の研究者には、実際にデータを使った実証分析の教育や訓練を受ける機会を与えられる必要があります。未だマイクロデータを利用したことがない研究者には、まずマイクロデータを使って、データ特性等を理解してもらう。学生や若手の研究者には、マイクロデータを用いた実証分析の演習等を行ってもらう。そうしたことができる環境を整備することが重要です。利用環境を整備することで、実証分析ができる人材を拡大・育成し、その結果として、マイクロデータを用いた実証研究を進展させ、学術研究水準を向上させることができると考えられます。このように「教育用擬似マイクロデータ」は、実証研究の発展、学術研究水準の向上に大いに貢献できるものと考えています。

一方、統計委員会の第Ⅱ期の「公的統計の整備に関する基本的な計画」（平成26年3月25日閣議決定）では、「広く一般に提供可能な『一般用マイクロデータ（仮称）』」の提供が位置付けられました。これは、「教育用擬似マイクロデータ」が公的統計のデータとして必要であることが認められたことを示し、より多くの利用者への提供が求められていると思われます。こうしたことから、現在、統計センターでは、「教育用擬似マイクロデータ」作成のノウハウや経験に基づき、統計局と共同で「一般用マイクロデータ（仮称）」の開発および提供を計画し、平成21年全国消費実態調査を対象に検討を行っています。

このように統計センターは、政府全体の公的統

計データの提供活動に尽くすとともに、統計教育賞の受賞を励みとして、これからの日本における統計教育の発展のためにも貢献していきたいと考えています。今後とも皆様から益々のお力添えを頂くことをお願い申し上げます。

受賞のことば

峰野 宏祐（東京学芸大学附属世田谷中学校）

この度は、第11回日本統計学会統計教育賞を授与していただき、誠にありがとうございます。私と生徒たちによる日々の実践の成果が、このような名誉ある賞という形で評価していただけることを、大変嬉しく思っております。それと同時に、今後この受賞に恥じぬ実践及び研究を行っていかねばなりませんので、非常に身の引き締まる思いでいっぱいです。

今回受賞のきっかけになりました、第11回統計教育の方法論ワークショップで発表させていただきました「数学的モデリング教材『桜の開花予想』の統計的観点による一考察」ですが、この実践研究では私の現在の統計教育に対する思いを反映させていただきました。生徒に「統計的な素養を身につける」とは、一体どういうことでしょうか。「このデータの場合はこういった処理をすればよい」といったことを、場当たりの一つ一つさらっていくことが、それにつながるとは思えません。むしろ、データを見たときにまず生徒が何を考えるかを大事にし、生徒が元来持っているデータ（ばらつき）に対する見方を引き出し、それを健全な方向へと修正・発展していけるような指導が必要かと思います。そのための指導として1つキーワードとしたいのが「数学的モデリング」です。

数学的モデリングは、現実的な事象に対し、数学的モデルをつくることによって問題を解決しようという行為といわれます。ここでいう数学的モデルとは、いわゆる定式化された指標のみを示しているわけではありません。生徒が問題場面、データに直面したときに、そこで考える素朴な統計的アイデアも含めて「数学的モデル」ととらえて

います。すなわち数学的モデリングをもとに統計教育を考えることの肝は、現実場面とデータ、データと統計的な手法（モデル）のように2つの相対的な世界があって、それらを往還しながらたまたき台となるモデルを健全な（妥当な）評価ができるものへと修正・発展させていくことにあるかと思えます。

今回の実践ではそのことを踏まえ、中学校の教材としてよく扱われる「桜の開花予想」を題材に、生徒がまずどのように時系列データや散布図を見るかを大事にした指導を考えました。1時間目では桜の開花日を時系列データから見ていきましたが、そこでは線形近似するような考えや、区間ごとに平均をとるような考え、周期性を検討するような考えが生徒から出されました。それらはいわゆるフォーマルな方法ではなかったかもしれませんが、時系列データを考察する際の重要なアイデアの素地が詰まっているかと思えます。それらの見方を価値付けしておけば、ゆくゆく生徒が別の、もっと難解な時系列データを分析していく際に、役立つことが期待できます。

ある生徒は「はじめの予想（時系列データ）は、開花日の規則性から求めたけど、開花日を決める要素は気候にあるはずなので、気候に規則性がないかぎり正しい予想ができないということに気づいた」と指摘しています。このことが別のデータ、すなわち気候のデータを集めてくるための必然性になりました。

そこで2時間目では、生徒が必要だと考えた気候データをこちらで用意し、それらを見て考察することにしました。生徒が挙げたデータは、気温、日照時間、降水量、湿度、風…等です。座標平面を使って散布図をかき、そこから相関関係を読み取っていきました。

統計的な手法を「知っている」我々からすれば、とりあえず近似直線を引いたり、相関係数を求めたりしたくなるころですが、そういった手法を獲得していない生徒だからこそ、多様な考えが生まれます。ある生徒は直線ではなく曲線を当てたり、プロットされた点全体を丸く囲んだり、2本

の直線で挟み込んだり…。一見すると価値の見えない方法に見えるかもしれませんが、そこには「気温が低いときはある程度相関が示せるけど、高いとあまり関係なくなる」とか、「多ければいいとかではなく、適度な量があって、それ以上でも以下でもダメなんじゃないか」など、生徒なりの、根拠のある分析をしていました。そういったことは、ただ「相関関係がありそうだったら、直線を引いてみよう」といった指導では見えてきません。生徒にまず素朴なモデルを導出させることによって、統計的な見方に「拡がり」が生まれた瞬間かと思えます。結果として相関の評価をするための見方も洗練され、ただ「直線を引く」のではなく「原因変数に対する結果変数の幅でみる」といった見方にも収束していきました。

当然授業の文脈でやることですから、指導者としてはまとめとしたい見方を持って授業に臨むわけですが、それ以上に生徒の素朴な見方が表出され、生徒に驚かされ、勉強させられた実践でありました。こういった生徒が本来持っている統計的な見方の芽を、刈らずに伸ばしていけるような実践を今後も行っていきたい所存です。

最後になりますが、今回の受賞に至りましては、共に学んできた生徒たちをはじめとして、同僚の先生や大学の先生、研究仲間等、多くの先生方のご支援あってのものであります。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。これからの統計教育、数学教育、並びに日本の教育が、未来の世界にとって実り多きものになりますよう祈念して、私の挨拶とさせていただきます。

2.3 第9回日本統計学会研究業績賞 受賞のことば

加藤 昇吾（統計数理研究所）

この度は、日本統計学会業績賞という大変名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。推薦に関わっていただいた先生方、今までにお世話になった共同研究・先輩・同僚の先生方に厚く御礼申し上げます。特に慶應義塾大学在学時にご指導いただいた清水邦夫先生には大変お世話になりました。

また、いつも支えてくれた家族に感謝いたします。

私は「円周上のコーシー分布」と呼ばれる円周上の確率分布に興味を持ち、それに関連した統計モデルを研究してきました。ここでは、円周上のコーシー分布にまつわる研究の背景と、その分布に関連した私の研究結果を紹介したいと思います。

円周上のコーシー分布は、角度の観測を含むデータの統計解析に用いられる確率分布の1つです。角度の観測とは、 $-\pi$ 以上 π 未満の実数、または円周上の点 $(\cos \theta, \sin \theta)$ として表現できる観測のことをいいます。角度の観測を含むデータには、統計解析をする上で大きな問題があります。それは、このようなデータを解析する上では、統計学が主に対象としている実数値データのための解析手法をそのまま使うことができないという問題です。

そこで現在に至るまで、統計学では角度の観測を含むデータの解析法に関する研究がなされてきました。とりわけ多く研究されてきたのが、「フォン・ミーゼス分布」と呼ばれる円周上の確率分布およびそれを応用した統計モデルです。フォン・ミーゼス分布は、実数上の正規分布からの自然なアナロジーにより導かれることから、「円周上の正規分布」と呼ばれることもあります。一方、正規分布が持ついくつかの扱いやすい性質が成立しない問題点も指摘されており、そのことがフォン・ミーゼス分布およびそれを応用した統計モデルの理論的性質を導くことを困難にしていました。

このような背景の下、私は1篇の論文をきっかけとして円周上のコーシー分布（以下、CC分布）に興味を持ちました。その論文はシカゴ大学のPeter McCullagh教授著の「Möbius transformation and Cauchy parameter estimation」(*The Annals of Statistics*, 1996年)です。CC分布は、古くから知られてはいたもののほとんど注目されない分布でしたが、この論文により多くの理論的性質が導かれました。そして、フォン・ミーゼス分布では成り立たないいくつかの扱いやすい性質が成立することが明らかになりました。例えばCC分布は、重要な円周上の変換「メビウス変

換」に閉じているという性質を持っており、これはフォン・ミーゼス分布には成り立たない性質です。

また上記の論文では、CC分布の性質を調べる際、確率変数とパラメータを複素数であらわすことにより、分布にまつわる表現と計算が驚くほどシンプルになること示しました。その論文の鮮やかな理論に私は感銘を受け、この分布の美しい性質をいかして解析的に扱いやすい統計モデルを提案することを目指しました。そして、CC分布を誤差分布として用いた回帰モデル(Kato, Shimizu and Shieh, 2008)とマルコフ過程(Kato, 2010)、CC分布を特別な場合として含む柔軟な確率分布(Siew, Kato and Shimizu, 2008; Kato and Jones, 2010, 2013, 2015)、CC分布の2変量分布への拡張(Kato, 2009; Kato and Pewsey, 2015)、などを提案しました。

最新の論文(Kato and Pewsey, 2015)では、CC分布を拡張した2変量角度データのための分布を提案し、その統計的性質を考察しました。そして、この分布は、確率密度関数や特性関数が陽な形で表現できること、パラメータの解釈が明確であること、効率の良い擬似乱数発生法が存在すること、パラメータ推定が容易であることなど、2変量フォン・ミーゼス分布には成り立たない多くの扱いやすい性質を持つことを明らかにしました。分布の導出にはメビウス変換を用い、メビウス変換とCC分布の関連性をいかすことで、上記の性質を得ることに成功しました。

今までの研究を振り返って感じることは、私はこれまで多くの出会いに恵まれてきたことです。素晴らしい研究者と共同研究できたこと、所属する研究機関で多様な考え方を持つ研究者と雑談やディスカッションができたこと、国内外の大学を訪問時に多くの研究者や学生と交流できたこと。これらの経験が意識的あるいは無意識に自身の研究に反映され、今回の受賞につながったのだと私は信じています。

角度の観測を含むデータの統計解析法の研究はまだ発展途上の分野です。今までは角度の観測を

含む1変量または2変量データのための統計手法が主に研究されてきましたが、多変量データのための統計手法はあまり研究されてきませんでした。現在は、多くの変量を持つデータが以前よりも頻繁に得られるようになりました。その中で角度の観測を有効に多変量解析に取り込むことは、今後重要になっていくのではないかと思います。私はこれから角度の観測を含む多変量データのための統計的手法を発展させることを目指していきたいと考えています。

受賞のことは

黒住 英司（一橋大学）

この度は、日本統計学会研究業績賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。推薦をいただきました先生方やこれまで指導をいただきました先生方、先輩・同僚・後輩、そして学会運営に関わる方々に心から御礼申し上げます。

今回の受賞の対象となった研究は構造変化に関する理論的な研究であります。そもそも構造変化の研究を始めるきっかけとなったのは、2004年に行った荒井洋一先生との共和分モデルに関する研究でした。比較的長期のデータを用いた経済時系列分析では、構造変化の可能性を考慮する必要がありますが、当時、構造変化を考慮した共和分検定は、帰無仮説の下で共和分関係が無い、というものでした。しかしながら、我々の興味の対象は共和分関係なので、共和分の存在を帰無仮説として設定する方がより望ましいという考えから、新たな検定方法を模索していました。研究をすすめるにつれて、我々が想定している仮説を検証する共和分検定は、構造変化点推定量の収束速度をきちんと求めないと導出できないことが分かりました。そこで、構造変化を含む共和分モデルにおける変化点推定量の研究を行ったのが、この分野の研究の始まりになります。

その後、2006年に京都大学のセミナーで二宮嘉行先生の構造変化モデルのAICに関する講演を聞いて興味を持ちましたが、しばらくは単位根や共和分の研究を行っていました。その数年後に、

当時指導していた大学院生が情報量規準に興味を持っていったようなので、情報量規準で構造変化の起きた回数を推定する研究を始めました。経済分析で比較的よく用いられる規準はAIC、マローのCp、BICですが、AICは対数尤度のバイアスの評価が重要になってきます（マローのCpもほぼ同様）。我々が考えていたモデルは構造変化点が未知のモデルであったので、構造変化点も未知パラメータとして扱わなければならない。そのため、変化点推定量の極限分布に関連したバイアスを評価する必要が出てきました。当時、既に変化点推定量の極限分布は導出されていましたが、このバイアス項の評価にはかなり時間を費やしました。誤差項をマルチンゲール差分過程とした比較的一般的なモデルを想定すると、求められるバイアスはモデルのパラメータに依存した複雑な表現となるのですが、正規性を仮定すると、バイアス項は「 $6 \times$ 構造変化の数」とシンプルなものになります。当時、論文の査読者に「なぜ6倍なのか、直観的に説明せよ」と質問されましたが、結局、直観的な説明はできませんでした。今でもその点はよく分かっていません。一方、BICについては当初はpriorによってその表現が大きく変わると予想していたのですが、なるべくnon-informativeとなるようなpriorを3つほど考えても、どれも同じ表現「 $2 \times$ 構造変化の数 $\times \log T$ 」に帰着したことは面白い結果だと思います。結局、正しいバイアス項をペナルティとして追加すると、情報量規準でも構造変化の数を高い精度で推定することができることが判明しました。

その一方で、非斉次の説明変数がある回帰モデルやパネルデータモデルの構造変化の検定といった、経済分析に使われるモデルでの構造変化の検定の研究を行ってききましたが、海外の学会などで発表を行うと何度か「検出力の非単調性」に関する指摘を受けました。検出力の非単調性問題とは、構造変化が大きくなればなるほど、逆に検出力が落ちてしまうという現象を指します。この現象は、帰無仮説の下で推定して得られた残差を用いて長期分散を推定することが原因であり、90年代末に

は知られていた問題ですが、しばしば見落とされがちな問題でもあり、私自身、見落としていたものであります。ボストン大学の Pierre Perron 先生や彼の指導を受けた Dukpa Kim 先生、山本庸平先生、岡達志先生らに数々の助言をいただき、この問題に大変興味を持ったことを覚えています。一方、対立仮説の下で得られた推定残差を用いて長期分散を推定すると検出力の非単調性問題はなくなるのですが、今度は検定のサイズが大きくなり歪んでしまいます。当時、この検定のサイズの歪みに強く興味を引かれ、その原因をいろいろ検討したのですが、結局、長期分散の推定量に大きなバイアスが生じていることが原因であると分かりました。そこで、長期分散のバイアス、厳密には、長期分散はスケール調整のために検定統計量の分母にあるものなので長期分散の逆数のバイアスを導出し、バイアス修正された長期分散推定量を用いた構造変化の検定を提案しました。この研究では、大学院生である山崎大輔君と何度も研究の話をして試行錯誤の結果、得られたものであります。

このように振り返ってみると、これまでの自分の研究は周りの研究者や大学院生との議論に大きく支えられてきたものであり、今更ながらに彼らにとっても感謝しております。研究は決して自分一人だけで行っているのではなく、仲間の助言の大切さをいつまでも忘れずに、今後も自身の研究に邁進していきたいと思っております。どうか今後ともご指導のほど、よろしく願いいたします。

2.4 第8回日本統計学会出版賞受賞 受賞のことは

金 明哲 (同志社大学)

このたびは、身に余る日本統計学会出版賞をいただき、誠に光栄です。まず推薦して下さった方々および審査委員の皆様へ感謝いたします。

この賞は言うまでもなく、執筆者の皆様、出版社および編集関係の皆様のおかげです。執筆者の中には、執筆中に家族または本人の大病や身内のご不幸などがあった方もおられ、さまざまなことに耐えながら原稿が完成していきました。執筆途

中の身内のご不幸により精神的に執筆が続けられず、刊行が遅れている巻もあります。

紙面を借りて、既刊の17巻を執筆していただいた方々 (藤井良宜、中村永友、姜興起、汪金芳、桜井裕仁、金森敬文、竹之内高志、村田昇、辻谷将明、竹澤邦夫著、谷村晋著、鈴木努、下川敏雄、杉本知之、後藤昌司、粕谷英一、山本義郎、飯塚誠也、藤野友和、里村卓也、飯田健、鄭躍軍、董彦文)、今執筆中の方々 (野田英雄、川崎能典、北門利英)、執筆者の家族の皆様、日々お世話になっている方々に心よりお礼を申し上げます。

振り替ってみると、シリーズの企画から、すでに十年の光陰が流れました。共立出版との交渉の前、いくつかの出版社にも当たりました。交渉の主な条件は、シリーズ刊行に実績があること、より多くの巻が刊行できること、執筆者が最大の恩恵を受けること、でした。出版社とはコネがなく、無名な私にとってはチャレンジでした。先見性のある共立出版の横田穂波様に感謝いたします。

共立出版の果敢な英断が功を奏し、日本におけるRに関する書籍は、すでに100冊を大きく上回り、欧米に大きな後れをとっているというようなことはありません。本シリーズの中には巻によっては、世界でも類がないものもあります。また、本シリーズの中のいくつかの巻はすでに第2版になっています。より良い本を世に残すため、第2版、3版を重ねながらバージョンアップできればと思っています。

統計科学は、数式の導出だけで済むものではないことは周知のとおりです。統計科学は、理論に基づいた計算による実証が不可欠であり、応用が前提になっています。Rはそのための適した環境です。

また、従来のメニュー操作型ソフトの限界により、近年のほとんどのビッグデータ処理システムにおける統計処理はRを用いている現状から、Rはますます重要視されています。最近、プログラミング教育にRを用いるケースも散見されています。

Rには短所もありますが、オープンソースであることや多くの統計科学およびデータサイエンスの研究者が利用しており、膨大な資源が共有できることから、さらに進化し続けることは疑いありません。Rのパッケージの数は指数分布型で増加しており、この原稿執筆時点（9月）で、すでに7000を超え、ますます環境が充実されています。本シリーズが日本における統計科学およびデータサイエンスの研究と教育に少しでも貢献できれば甚幸です。

本シリーズの刊行が時間的に長引いたことがあり、共立出版から20巻で止めるように助言を受け、やむを得ず新たなシリーズをスタートしています。

統計科学およびデータサイエンスは、時代に合せて進化しつづけなければなりません。今回の受賞を励みとし、時代の変化を事前に見極めながら、統計科学の研究および教育に、より一層邁進する所存です。叱咤激励、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2.5 第29回日本統計学会小川研究奨励賞 受賞のことは

平野 敏弘（NEC 中央研究所）

このたびは「小川研究奨励賞」という名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。受賞の連絡を頂いたときは全く予想していなかったので非常に驚きました。大変伝統ある賞を受賞するにあたって、ありがたく思うと同時に畏れ多くも感じております。大学院時代にお世話になりました東京大学大学院経済学研究科経済専攻統計学コースの先生方、長きにわたる学生時代において激励し続けてくださった指導教員の矢島美寛教授、私に統計学の醍醐味をお教えくださった東京工業大学の宮川雅巳教授に心から御礼申し上げます。

今回の受賞論文は、空間統計学のトピックの1つである大規模空間データに対する高速計算についての理論的研究です。共分散行列の逆行列の計算はサンプル数の3乗のオーダーの計算量となるので空間データが大量に得られた場合、計算負荷が非常に大きくなります。この問題に対処するた

め、現在までに様々な高速計算手法が提案され、それらが最尤法、クリギング、マルコフ連鎖モンテカルロ法、スパース推定などに適用された場合の理論的性質の導出が行われてきました。同様の問題構造は機械学習におけるガウシアンプロセス回帰にもあらわれます。

このトピックについて、最初は covariance tapering という高速計算手法から研究を開始しました。このテーマに興味を持ったのは大量の空間データをどのようにして高速に計算するかというよりは、そこで展開されていたクリギングに対する漸近論を面白く感じたからです。観測領域が固定された状態で不等間隔にサンプリングが行われていく infill asymptotics が採用されているなどの理由により研究は難航しましたが、最終的に、正規確率場のエルミート多項式で表現可能な非正規確率場において、最適な非線形予測量、最良線形不偏予測量、covariance tapering を用いた高速計算可能な近似的な最良線形不偏予測量の3つが mean squared error の意味で漸近的に同等であることを証明しました。

次のテーマとして選択したのが、今回の受賞論文である一般化最小二乗推定量の乗法型近似による高速計算についてです。一般化最小二乗推定量は誤差項の共分散行列の逆行列を含んでいるので空間データのサンプル数が大きい時その計算時間は大きくなります。そこで、本論文では真の共分散関数を自己回帰過程の共分散関数の積で置換する乗法型近似を提案しました。共分散行列が自己回帰過程の共分散行列のクロネッカー積の形で表現されるため、結果として高速計算が可能となります。データが格子点状で観測されている状況を考えているため、漸近的性質の導出の方法は、Grenander and Rosenblatt (1957) による時系列データに対する漸近論を格子点上のデータに拡張した Yajima and Matsuda (2008) に基づいています。この increasing domain asymptotics の枠組みで乗法型近似を用いた推定量を擬似最良推定量と見なし、漸近共分散行列を導出しました。これは、部分的ですが、時系列の分野で擬似最良推定量の漸近

的性質を導出している Rozanov and Kozlov (1969), Amemiya (1973), Engle (1974) などの結果の空間統計学への拡張と見なすことができます。今後の研究テーマとしては、上記論文は空間統計学における短期記憶過程が仮定されています

ので、長期記憶過程を仮定した下での擬似最良推定量の漸近共分散行列の導出が考えられます。また、大規模空間データに対する高速計算については、多変量・非定常・時空間データに対する高速計算手法が応用上重要になってくると思われます。

3. 2015年度統計関連学会連合大会の報告

2015年度統計関連学会連合大会

運営委員会委員長 坂本 亘 (岡山大学)

実行委員会委員長 栗原考次 (岡山大学)

プログラム委員会委員長 山口和範 (立教大学)

3.1 大会概要報告

坂本 亘 (岡山大学)

2015年度統計関連学会連合大会を、2015年9月6日(日)～9日(水)に岡山大学津島キャンパスにて開催いたしました。本大会は、応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会、統計教育大学間連携ネットワーク(略称 JINSE)の共催により開催いたしました。

参加者数は延べ943名(チュートリアル参加者数208名、大会参加者数735名)、発表件数は338件(キャンセルを除く)にのぼり、盛大な大会となりました。懇親会はホテルリマーニ(瀬戸内市牛窓町)にて行われ、200名を超える参加者が集まりました。また、連合大会では初の試みとしてエクスカッションが催され、牛窓の自然と町並みを楽しんでいただきました。

お陰をもちまして、本大会が無事に終了し、大役を務めることができ、大変安堵しております。すべての講演者、座長、企画セッションオーガナイザー、出席者の皆様に、心より感謝申し上げます。アルバイトでお手伝いいただきました岡山大学生の皆様にも御礼を申し上げます。また、委員の負担軽減のため、一部事務局業務について外部委託を行いました。関係者の皆様のご協力、ならびに6学会の会員の皆様のご理解に感謝申し上げます。最後に、岩崎組織委員長、栗原実行委員長、

山口プログラム委員長をはじめ、ボランティアで活動してくださいました、実行委員、プログラム委員、運営委員の皆様のご尽力に深く敬意を表します。

3.2 企画セッション報告

長塚 豪己 (中央大学)

7日(月)から3日間開催された大会では、ソフトウェア・デモセッションおよび20件の企画セッションが実施されました。今回の連合大会では、英語による国際セッションが4セッション構成されたりして、海外の研究者との共同研究発表も多くあるなど、国際化が感じられたのが特徴的でした。

企画セッションのうち、5つのセッションは、文部科学省科学技術試験研究委託事業「数学・数理科学と諸科学・産業との協働によるイノベーション創出のための研究促進プログラム(略称:数学協働プログラム)」による数学協働プログラム・ワークショップ「統計科学の最先端と産業界・諸科学への展開」として、大阪大学金融・保険教育研究センター・文部科学省(統計数理研究所)・統計関連学会連合の共催事業として一般公開されました。以下テーマとオーガナイザーのみ示します。

・超高頻度データ解析と計算統計 内田雅之(大阪大学)

- ・応用統計学会 学会賞受賞者講演 大西俊郎 (九州大学)・井元清哉 (東京大学)
- ・統計的従属性モデリングの理論と応用 増田弘毅 (九州大学)
- ・公的統計におけるデータ利用の新たな展開 小林良行 (総務省統計研修所)
- ・日本計量生物学会シンポジウム「適正な医学研究の推進と発信に向けて」 手良向聡 (京都府立医科大学)・大森 崇 (神戸大学)
- ・日本計量生物学会奨励賞受賞者講演 大森 崇 (神戸大学)
- ・日本統計学会会長講演および各賞授賞式 鎌倉稔成 (中央大学)
- ・日本統計学会各賞受賞者記念講演 鎌倉稔成 (中央大学)
- ・日本計量生物学会ワークショップ：プロの生物統計家のための行動基準を考える教育プログラム 佐藤恵子 (京都大学)・和泉志津恵 (大分大学)
- ・スポーツにおけるビッグデータの活用 酒折文武 (日本統計学会スポーツ統計分科会, 中央大学)
- ・日本分類学会シンポジウム：コレスポンデンス分析・Dual Scaling・数量化理論再考 今泉忠 (多摩大学)
- ・医学分野でのシミュレーションの応用 弘新太郎 (ファイザー株式会社)
- ・CSA-KSS-JSS joint international session I: Recent Developments in Biostatistics Yuan-chin Chang (Academia Sinica)・Donguk Kim (Sungkyunkwan University)・塚原英敦 (成城大学)
- ・CSA-KSS-JSS joint international session II: Machine Learning and Its Applications Yuan-chin Chang (Academia Sinica)・Donguk Kim (Sungkyunkwan University)・塚原英敦 (成城大学)
- ・CSA-KSS-JSS joint international session III: Statistical Methods in Finance Yuan-chin Chang (Academia Sinica)・Donguk Kim (Sungkyunkwan University)・塚原英敦 (成城大学)
- ・アジアの公的ミクロ統計の活用 馬場康維 (統計数理研究所)
- ・大学教育の質的改革 I ―入試改革・反転授業とアクティブラーニング― 竹内光悦 (統計教育委員会委員長, 実践女子大学)・藤井良宜 (統計教育分科会主査, 宮崎大学)・渡辺美智子 (慶應義塾大学)
- ・大学教育の質的改革 II ―知識基盤社会におけるデータサイエンス教育の展望― 竹内光悦 (統計教育委員会委員長, 実践女子大学)・藤井良宜 (統計教育分科会主査, 宮崎大学)・渡辺美智子 (慶應義塾大学)
- ・自然科学へのデータ駆動型アプローチ 福水健次 (統計数理研究所)
- ・Wakimoto Memorial Session (CIPS-JSS-KSS International Session for Young Scholars) 塚原英敦 (成城大学)
- ・ソフトウェアデモンストレーションセッション

3.3 コンペティションセッション報告

林 篤裕 (九州大学)

セッションは、2日間にわたって4セッションが設けられました。今年度は過去最高の30件の発表があり、特に4つ目のセッションでは他の行事との関係から連続して10件の発表が行われました。審査はプログラム委員と各学会から選出された委員で担当しました。今年度も昨年と同様に、研究の内容と共にプレゼンテーションも審査対象とすることがアナウンスされており、審査委員は各報告に対してA(4点)～E(0点)のスコアを与え、スコアの単純平均による順位によって最優秀報告賞と優秀報告賞を決定しました。

研究内容・プレゼンテーション共に良く準備された報告が多く、入賞者の選考には苦悩しましたが、最終的に1件を最優秀報告賞、残りの上位4件を優秀報告賞とし、8日(火)夕方に表彰式を執り行いました。

最後に、他のセッションへの参加を犠牲にして審査に当たっていただいた審査委員の方々に、この場を借りてお礼申し上げますと共に、入賞の有無

に関係なく、ご発表いただいた方々の研究が今後益々進展することを願っております。今年度の表彰者は下記の通りです。

最優秀報告賞（1件）

松田孟留（東京大 情報理工）

「状態空間モデルを用いた神経電位の位相推定」

優秀報告賞（4件）

大前勝弘（総合研究大学院大）

「異質性が内在する2標本検定問題におけるロバストな統計量

田辺竜ノ介（大阪大 基礎工）

「spike and slab 事前分布を用いた罰則付き回帰」

茂木快治（早稲田大）

「Regression-Based Mixed Frequency Granger Causality Tests」

森川耕輔（大阪大 基礎工）

「Semiparametric Inference under Nonignorable Nonresponse」

3.4 チュートリアル・市民講演会報告

山口 和範（立教大学）

初日は13時から、2つのチュートリアルセミナーが開催され、208人が受講しました。

チュートリアルのテーマ1では、おふたりの講師に、独立行政法人統計センターが総務省統計局と協力して実施している統計におけるオープンデータの高度化の取り組みとその活用方法について丁寧に説明をしてもらいました。昨年度から各種統計の提供が開始されていますが、その中のAPI機能とGIS機能について詳細な説明がなされました。API機能は、e-Statに登録されているデータをプログラムなどから自動的に取得できるなど、これまでのデータ収集の方法を大きく変える機能となっており、新しいGIS機能（地図による小地域分析）は、利用者の保有するデータをシステムに登録し、国勢調査の小地域集計結果などと組み合わせることで地図上で表示できるなど、地図を使用した新たな分析が可能となっています。あわせて

具体的な使用方法や分析事例も紹介されました。

もう一つは、電気通信大学の川野秀一氏による「スパース推定と統計解析」です。スパース推定は、統計モデルに含まれる不要なパラメータの値を0と推定することにより、パラメータの推定と変数選択を同時に行う統計的推定法で、工学、生命科学、医学などの様々な分野で成功を収め、いまなお著しく理論面、応用面ともに発展を遂げている最近注目されている統計手法です。このセミナーでは、スパース推定に関心を持ち始めた方を対象にするということで、スパース推定に関する基本的な事柄と最近の発展について概説があり、その後正則化法の解説、lasso推定法をはじめとした様々なスパース推定法の紹介がなされました。注目が集まっている内容であったこともあり、参加者が想定よりも多く会場を変更するなど、盛会でした。

チュートリアルに引き続き、一般に公開された市民講演会が実施されました。

今年の市民講演会は「ビッグデータ・インパクト-新たなデータ活用がもたらす世界-」がテーマで、ビッグデータの活用の実態を身近な事例を通じて市民の方々に知っていただくことを目的として企画され、講演は2部構成で、その1つ目の講演が教育に関わる話題で、2つ目はスポーツ、特にサッカーにおけるデータ活用の話でした。1つ目の講演では、岡山に由来のあるベネッセ教育総合研究所の木村治生氏から、教育の現場でのデータの活用事例を紹介していただきました。データの活用により、コンピュータによる対面指導の実現が可能となりつつある点が大変興味深く、2つ目の講演では立教大学の安松幹展氏が「サッカーにおけるゲーム分析データの活用」というタイトルで、サッカーにおけるデータの歴史から最先端の現場まで、具体的な事例を交えて紹介していただきました。東京オリンピックのころの新聞記事を引用され、すでにトラッキングデータの活用事例があったことや現在のトレーニングにおいて試合データの活用がなされている点など興味深く聞くことができました。両方の講演を通じて、

多分野において統計が役立っていることを市民の方に知っていただいた講演になったのではないかと評価しています。

3.5 文部科学省 数学協働プログラム・ワークショップ報告

長畑 秀和 (岡山大学)

2015年度統計関連学会連合大会において、岡山大学大学院社会文化科学研究科、文部科学省(統計数理研究所)、統計関連学会連合の共催で、数学協働プログラムによるワークショップ「統計科学の新展開と産業界・社会への応用」を9月7日、8日の2日間にわたって開催いたしました。

昨年に引き続き今年度も特に産業界・社会への広範囲の分野における応用に、数学・数理科学の知見がどのように活用していくことができるのかを明らかにしていくため、大会の企画セッションのうち、「統計的従属性モデリングの理論と応用」、「超高頻度データ解析と計算統計」、「スポーツにおけるビッグデータの活用」、「医学分野でのシミュレーションの応用」、「アジアの公的マイクロ統計

の活用」の5つのセッションによってワークショップを構成しました。

ワークショップでは、統計数理研究所の藤澤洋徳先生による数学協働プログラムの活動紹介に引き続き、合計22の講演が行われました。大学・研究所等機関の他、それぞれの話題に関連した様々な産業界から研究発表者をお迎えし、活発な議論が交わされました。ワークショップ会場は常に熱気であふれ、参加者で会場が満員となることもありました。数学・数理科学に加えて諸科学の大学・研究所や産業界・官庁など広範囲からの参加者があり、成功裡に終えることができました。これもひとえに、セッションオーガナイザーが取り上げてくださった魅力的なテーマ、講演者の方々の興味深い研究発表、参加者の皆様との活発な議論の賜物と、心より皆様に感謝を申し上げます。

最後に、プログラムを選定してくださった大会プログラム委員長である立教大学の山口和範先生には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

4. 第10回日本統計学会春季集会のお知らせ (第一報)

中野 純司 (日本統計学会理事長)

青木 敏, 田中 研太郎, 二宮 嘉行 (企画・行事担当)

照井 伸彦 (春季集会実行委員長)

第10回日本統計学会春季集会を下記の要領で開催いたします。

春季集会には口頭発表セッションとポスターセッションがあります。

口頭発表のセッションは招待講演を基本としますが、会員の皆様からのセッションのご提案も受けいたします。セッションのご提案は

11月13日 (金)

までに下記青木宛てにお知らせください。

aoki@math.kobe-u.ac.jp

なお、会場等の関係で、開催できるセッションは限られていますので、ご希望に沿えない場合が

あります。

ポスターセッションではポスター発表を広く募集します。申し込み締め切りは2月中旬を予定しています。詳細は次号の会報にてご案内いたします。

多数の会員の皆様のご発表とご参加をお待ちしています。

・期 日：2016年3月5日 (土)

・会 場：東北大学川内南キャンパス文科系

総合講義棟 (仙台市青葉区川内27-1)

・参加費：無料 (ただし懇親会は有料)

5. 統計検定 RSS/JSS 試験 最優秀成績賞の授与について

岩崎 学 (日本統計学会会長)

2015年5月に実施した統計検定 RSS/JSS 試験 Graduate Diploma において、優秀な成績で、全てのモジュールの平均点が100点満点中65点以上である Pass with Credit としても認定されました。

高部 勲 さん (総務省)

山形 成彦 さん (総務省)

に対し、日本統計学会では「統計検定 RSS/JSS 試験 優秀成績賞」を贈呈し、表彰することになりました。

表彰式は、2015年9月8日、2015年度統計関連学会連合大会の「日本統計学会各賞授賞式」のセッションにおいて行われました。

6. RSS/JSS 試験 (2015年5月実施) 合格者

中野 純司 (日本統計学会理事長)

統計検定の一環として英国の The Royal Statistical Society と契約を結び2012年より RSS/JSS 試験を行っています。RSS/JSS 試験 (Higher Certificate) は全部で8モジュールからなり、そのうち6モジュールに合格すると、RSS および JSS の連名で Higher Certificate が認定されます。

RSS/JSS 試験 (Graduate Diploma) は全部で5モジュールからなり、すべてのモジュールに合格すると、RSS および JSS の連名で Graduate Diploma が認定されます。ここでは2015年5月に実施された試験の合格者のうち公開を希望されない方を除く方々の氏名を、Higher Certificate の認定者およびモジュールごと、Graduate Diploma の認定者およびモジュールごとに掲載します。掲載は姓のアルファベット順です。

(注) Higher Certificate 合格者での上付きの *C は Pass with Credit, *D は Pass with Distinction を表します。無印は合格を表します。

Higher Certificate の認定者：

清川真也^{*D}、小池健太^{*D}、宮崎 優^{*D}、石原 渚^{*C}、井添慎太郎^{*C}、岸 和希^{*C}、竹内 光^{*C}、吉田元気^{*C}、今井紀子

モジュール1 (データの収集と解釈)：石橋佳久、石原 渚、井添慎太郎、今井紀子、岡部格明、

木村敏明、清川真也、久保征哉、小池健太、島本翔子、谷 芳明、中山昌紀、平井宏英、間崎武郎、丸山健夫、宮崎 優、脇本 守

モジュール2 (確率モデル)：石橋佳久、石原 渚、岡部格明、清川真也、久保征哉、栗村信一、小池健太、小林記緒、島本翔子、朱 匡一、谷 芳明、間崎武郎、宮崎 優

モジュール3 (基礎的な統計的方法)：石橋佳久、石原 渚、今井紀子、岸 和希、清川真也、久保征哉、栗村信一、小池健太、朱 匡一、間崎武郎、宮崎 優

モジュール4 (線形モデル)：石原 渚、井添慎太郎、今井紀子、大下健史、河相健二、清川真也、久保征哉、小池健太、小林記緒、朱 匡一、谷 芳明、間崎武郎、宮崎 優

モジュール5 (確率と統計的推測の発展内容)：石橋佳久、石原 渚、井添慎太郎、清川真也、久保 真、小池健太、朱 匡一、間崎武郎、宮崎 優

モジュール6 (統計学の発展的応用)：石原 渚、井添慎太郎、今井紀子、大下健史、岸 和希、清川真也、小池健太、吉田元気

モジュール7 (時系列と指数)：小池健太

モジュール8 (調査のための抽出と推定)：石橋

佳久, 今井紀子, 岡部格明, 久保征哉, 胡内健一, 小林記緒, 竹内 光, 宮崎 優, 吉田元氣
Gradate Diploma の認定者 :

高部 勲*^C, 山形成彦*^C

Module 1 (Probability distributions) : 小田秀匡, 草場 稷, 工藤誠也, 友寄一郎, 平井 聡, 八木祐治

Module 2 (Statistical inference) : 小田秀匡, 竹内

維斗文, 友寄一郎

Module 3 (Stochastic processes and time series) : 小田秀匡, 河本 哲, 草場 稷, 友寄一郎, 平井 聡

Module 4 (Modelling experimental data) : 高部 勲, 山形成彦

Module 5 (Topics in applied statistics) : 小田秀匡, 草場 稷, 関口好浩, 山形成彦

7. 2015年6月統計検定の成績優秀者

中野 純司 (日本統計学会理事長)

2015年6月29日に第6回目の統計検定が4試験種別で行われました。以下に、各試験種別の合格者のうち、成績優秀者でかつ公開に同意された方々の氏名を掲載します。掲載は姓の五十音順です。また、本情報は統計検定のホームページでも公開しております。

準1級

最優秀成績賞 (S) : 秋本慎弥, 石原響太, 上野山徹, 久力 洋, 辻野辰彦, 樋口三郎, 平井 聡, 吉川祥子

優秀成績賞 (A) : 五十嵐剛, 大槻兼資, 高部 勲, 中村慎二, 橋本耕一, 幡山五郎, 韓 舜基, 藤原広之, 牧田洋一, 松下耕三, 松本卓之, 水谷瑠美子, 宮川俊樹, 安田裕和, 山川信之

2級

最優秀成績賞 (S) : 有原一登, 井床利生, 上野山徹, 尾林慶一, 梶山 優, 川原靖雄, 北村拓也, 佐藤秀和, 志賀優貴, 高山晃一, 谷口昇志, 辻野辰彦, 富山幸一, 那波伸敏, 平松雄司, 福江一起, 藤原広之, 三上太郎, 光武麻子, 宮川俊樹, 守屋克紀, 山本耕平

優秀成績賞 (A) : 赤羽うらら, 麻田和彦, 伊藤雅人, 伊藤 遼, 岡田航一, 小川弘武, 奥村啓太, 甲斐下英一, 金子恭史, 川上創司, 北川隆

行, 鈴木涼平, 須藤春樹, 高橋亮彦, 竹内太郎, 武田康宏, 田島 拓, 田中智之, 田淵規之, 橋本英樹, 服部慎也, 林 綾人, 藤川 流, 細川耕治, 堀本健人, 前川隆文, 松下耕三, 水野勝史, 八木愛世, 山田琴音, 吉崎浩二, 和田昌樹, 渡邊康明

3級

最優秀成績賞 (S) : 井坂健人, 井上優子, 岩田貴宏, 奥谷大介, 高山弘之, 鈴木康子, 田中理瑛, 千葉友樹, 仁枝洋一, 野間康平, 平山未来, 比留間祐太, 福田智洋, 松本大輔, 道山奈美子, 山崎将汰, 吉田貴寛

優秀成績賞 (A) : 秋間由莉, 浅野顕也, 安部真衣, 甘利岳人, 荒木祥太, 井崎 暁, 石岡佐和子, 今中早織, 緒方佑亮, 小田憲貴, 片岡久実, 狩野 舞, 亀井雅人, 鯨井剛将, 小林亮輔, 小松篤史, 近藤成径, 白井裕一, 菅井康之, 鈴木一真, 曾根悠斗, 高橋裕也, 高橋ゆか, 竹田俊夫, 鳥垣内優太, 中野和俊, 中野早貴, 西垣辰彦, 馬場千秋, 村瀬優介, 山口順也, 吉田泰樹

4級

最優秀成績賞 (S) : 岩田貴宏, 中島俊樹, 温品 豊永, 山森直樹

優秀成績賞 (A) : 李 晨, 大神健太

8. 統計検定合格者の声

岩崎 学（日本統計学会会長）

統計検定（2014年11月30日実施および2015年6月21日実施）の合格者よりいただいた声を掲載します。

1級（社会科学）合格

統計学自身の面白さとその応用範囲の広さに惹かれていきました。

上原 雅俊さん（東京大学2年）

大学では幾何や解析の勉強をしていたのですがその抽象さに少し辟易して何かもっと応用が見えやすい数学をしてみようと思ったのが統計の勉強を始めたきっかけでした。その時は夏だったので一つの目標として統計検定1級を秋に受けてみることにしました。そこでまず初めに簡単な統計学の本を読んでみました。そしてその次にもう少し骨のある統計学の本や応用分野である社会科学も見据えて時系列解析と計量経済の本を何冊か読んでみました。学んでいくうちに統計学自身の面白さとその応用範囲の広さに惹かれていきました。

その後、試験前になって統計検定1級対応テキストを使いつつ過去問に取り組み始めました。問題を解いていく過程で分かっているようで分かっていなかったところが多々あることが判明し、そのたびテキストと照らし合わせて理解を深めていきました。

試験直後は時間が足りなかったことや誤って覚えていたことがあって失敗したなど思っていたのですが受かっていて嬉しかったです。

最近では機械学習やバイズ統計の本を読んでいきます。統計検定で勉強したことはそれらを学ぶ基盤としてとても役に立っています。本当に受けて良かったと感じます。まだまだ実際のデータに触れて解析した経験がないのでそのような機会をこれから作っていきたいです。そして統計学の中にはまだ私の知らないことが多々あるので学習を

さらに続けていきたいと思います。

準1級合格

統計学は企業法務の弁護士にとっても重要な言語です。

中村 慎二さん

（アンダーソン・毛利・友常法律事務所 弁護士）

統計検定は、何年か前に金融関係の資格試験を受験するため、とある大学で開講された社会人向けの統計学の講義を受講した際に、その講義を担当された教授から教えていただきました。平成27年から開始する準1級に相当する内容まで勉強する機会があったため、その機会を生かし準1級の合格を目標に勉強を再開しました。

私が担当している企業法務の分野では、近年回帰分析の重要性が飛躍的に高まっています。たとえば、株価を直接観察できない非上場の企業の株価の推定値はいくらなのか、またはある企業の株価が下落した原因がその企業の経営上の要因なのかそれとも株式市場全体の停滞と連動する市場要因なのか……明確な解答のないこの問いに答えるための足掛かりとして、分析の専門家の方々が回帰分析の手法を使うことがあります。その分析結果が重要なM&Aの意思決定の基礎となることもありますし、紛争の場面で分析結果が裁判所に提出され、その解釈の結果が裁判に勝つか負けるかの決定的要因となることもあります。依頼者の正当な利益を守るために分析結果を正確に理解し、その有用性と同時に限界を把握し指摘することが、法律家の業務の領域に入りつつあることを実感するようになりました。

準1級は、基本的には2級の参考書に加え多変量分析や統計分析の入門書を読めば十分に対応できる印象があります。もっとも、2級よりも計算量が多いため、2級の過去問題集を、選択肢や問

題文の誘導なしに最後まで解く練習をすることや、余裕があれば（すべて記述式である）1級の過去問題集の基礎的な部分を解いてみるのも有効だと思います。実際の準1級試験は時間不足でした。配点を踏まえた時間配分の計画をあらかじめ立てることをお勧めします。

ハードルが高いとは思いますが、将来的にはなんとか1級にもチャレンジしてみたいと考えています。今後も統計学の分野の自己研鑽に励んでまいります。

2級合格

一般的な統計学に関する知識を深められたと思います。

水間 浩太郎さん（鹿児島大学2年）

この統計検定という資格の存在は大学のポスターで知りました。もともと、統計学という分野に興味があったので、周りの人を何人か誘って受験することを決めました。それにあたり、大学で講義後に自主ゼミを開き、統計学や確率論について勉強し始めました。初めはとて初歩的な内容でしたが、検定試験の間近になってくると、統計検定2級の内容を超えた分野まで扱えるようになりました。この勉強会で我々はこの検定に限らず一般的な統計学に関する知識を深められたと思います。

近年では、世間で統計学に関連したデータマイニングやビッグデータに熱い視線を注がれています。しかしその反面、これまでメディア等で、いかにずさんなデータの扱い方がされてきたのかという問題も取り上げられています。このような問題を解消するためにも今後、この「統計検定」という資格は間違いなく注目を集めるでしょう。そのような資格を得られたことを、非常に嬉しく思います。今回の試験はあくまで一つのステップであると考え、今後とも統計学の勉学に励みたいのです。

最後になりますが、この統計検定を受験するにあたり、大変お世話になった青木敏先生そして、支えてくれた家族に感謝申し上げます。

統計勉強サークル活動の成果。

藤川 流さん（小野薬品工業株式会社）

私は製薬企業に勤め、新薬の研究開発に従事しています。これまで業務で有意差検定や推定を行っていましたが、その理論が分かっておらず、結果を鵜呑みにしていることに危機感を覚えています。そんな折に、社内では統計学を勉強するサークルが発足したのでこれに参加し、本格的に勉強を始めました。サークルでは9人のメンバーが、ナビゲーター役の先輩の指導の下、統計学の基礎を勉強してきました。

勉強を始めて1年が経過した頃、理解度を確認するため、サークルのメンバーで統計検定2級に挑戦することになりました。いざ過去問を見て勉強を始めてみると、教科書を読んで理解した気になっていたことが多く、あまりに問題が解けないことに愕然としました。それからは基礎的な理論を再度勉強し、過去問を参考にデータを統計学的に処理し結論を導き出す方法を学びました。更に、先輩が中心となってサークル内で重要な点や分かりにくい点などを共有して勉強したことで、一層理解が深まりました。

皆で励まし合いながら勉強を継続した結果、サークルの受験者全員が合格することができました。今後はさらに発展的な内容について勉強を続けていき、将来は準1級、1級の合格を目指したいと思います。

今回統計検定を受験したことで、自分がきちんと理解していなかった点に分かり、統計の手法をどのように使うのかを知ることが出来ました。これは一人で教科書を使って勉強していた時にはわからなかったことで、統計検定を受験してよかったと思います。すでに統計学を学ばれている方にとって、現状の理解度を知ることができること、更に、合格を目指して勉強するモチベーションが上がることから、統計検定は非常によい機会になると思います。

3級合格

データサイエンティストとして活躍するために、

松本 大輔さん

(NEC ソリューションイノベーション株式会社)

受験のきっかけは、データサイエンティストという職業に興味を持ったことから始まりました。自分が今後データサイエンティストとして活躍していくには、IT技術に加えて業務知識や統計学の知識が必要であると感じていました。普段の業務の中でIT技術や業務知識は蓄積させることができても、統計学の知識は自分で勉強していかなければ習得できないと思い、統計学の勉強を始めることと統計検定の受験を決意しました。

試験対策は、公式テキストでどのようなテーマが出題されるかを一通り理解し、その後、過去問

題集を利用して実践的スキルを高めていきました。高校では数Ⅱ・数Ⅲまで、かつ大学も文系の学部に進みましたが、3級の内容であれば初見のテーマは限られており、3ヶ月の勉強期間でテキストの内容をほぼ理解できるレベルにまで到達できました。

結果としては、初めての受験でしたが合格だけではなく、最優秀成績賞として表彰状も頂きとても満足しています。

今後、データサイエンティストとして業務の中で統計学を使用していくにはまだ知識が不足していると感じています。引き続き統計検定2級にも挑戦し、統計学の知識をさらに深めて行きたいと思います。

9. 理事会・委員会報告 (2015年7月18日開催)

一般社団法人 日本統計学会

理事会議事録

理事会 (2015年7月18日) 報告

日時：2015年7月18日 (土) 午後0時00分～午後0時30分

場所：統計数理研究所八重洲サテライトオフィス

出席者：

理事 岩崎学会長，中野純司理事長，酒折文武 (庶務)，間野修平 (庶務)，山下智志 (会計)，倉田博史 (会誌編集欧文)，笹田薫 (会誌編集和文)，森裕一 (広報)，青木敏 (大会・企画・行事)，塚原英敦 (国際)，照井伸彦 (渉外)，瀬尾隆 (渉外) (以上、12名、カッコ内は役割分担)

監事 鎌倉稔成 (以上、1名)

第1議案 研究部会新設公募について

中野理事長より、資料に基づき、研究部会の新設の応募期間を2015年12月4日 (金) から2016年2月3日 (水) とし、募集開始に合わせて会報

165 (10月30日発行予定) や学会ホームページで会員に周知する提案があり、審議の結果、承認した。

第2議案 会員の入退会 (回覧)

中野理事長より提示された回覧資料の内容を承認した。

一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時：2015年7月18日 (土) 午後0時30分～午後3時30分

場所：統計数理研究所八重洲サテライトオフィス

出席：理事12名，監事1名，委員1名 計14名

岩崎会長，中野理事長，酒折，間野，山下，倉田，笹田，森，青木，塚原，照井，瀬尾，鎌倉監事，田畑委員

<報告事項>

1. 欧文誌編集委員会

倉田委員長より、第45巻第1号 (2015年9月発行予定) の編集作業の進捗状況について報告され

た。

2. 和文誌編集委員会

笹田委員長より、第45巻第1号（2015年9月発行予定）、第43巻第2号（2016年3月発行予定）の編集作業の進捗状況について報告があった。

3. 大会委員会

青木委員長より、資料に基づき、2015年度統計関連学会連合大会に関する報告があった。

4. 企画・行事委員会

報告事項なし。

5. 庶務委員会

酒折委員長より、資料に基づき、会員名簿の冊子を希望する場合は、ウェブからPDFをダウンロードし、手書きで記入、捺印の上、事務局まで返送（自費負担）、とすることが報告された。

6. 広報委員会

報告事項なし。

7. 国際関係委員会

塚原委員長より、資料に基づき、2015年度統計関連学会連合大会における CSA-KSS-JSS Joint International Sessions 2015 と Wakimoto Memorial Session (CIPS-JSS-KSS International Session for Young Scholars)、また、10th ICSA International Conference の協賛について報告があった。

8. その他

照井理事より、昨年度の科研費（研究成果公開促進費）は不採択であったこと、今年度については引き継いで情報を集めていることが報告された。

瀬尾理事より、統計検定の合格者の記事を会報に載せるとの報告があった。

<審議事項>

1. 欧文誌編集委員会

審議事項なし。

2. 和文誌編集委員会

審議事項なし。

3. 大会委員会

審議事項なし。

4. 企画・行事委員会

青木委員長より、資料に基づき、2016年度の春季集会は2016年3月5日（土）に東北大学川内南キャンパス文科系総合講義棟で開催するとの提案があり、承認された。また、照井理事より、東北大学サービス・データ科学研究センターと共催とする提案があり、審議の結果、承認された。

5. 庶務委員会

審議事項なし。

6. 広報委員会

審議事項なし。

7. 出版企画委員会

審議事項なし。

8. 国際関係委員会

審議事項なし。

9. その他

審議事項なし。

今後の予定

9月6日午後6時00分～ 役員・代議員協議会
岡山大学 市民講演会（～午後6時00分）終了後

11月22日午後0時00分～ 理事会・委員会
統数研八重洲サテライト

10. 2015年役員・代議員協議会記録

酒折 文武・間野 修平（日本統計学会庶務担当理事）

日時：2015年9月6日18：00～20：00

場所：岡山大学創立50周年記念館2階会議室

参加人数：36名

議題

1. 委員の交代について

2. 委員会の活動について

3. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについて

4. Japanese Journal of Statistics (JSS) 構想について

5. 学会の Web の更新について

の活動について

6. 統計教育大学間連携ネットワーク (JINSE)

7. その他

11. 研究部会新設公募

中野 純司 (日本統計学会理事長)

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計の発展に寄与して参りました。この制度は公募制をとり、原則として年1ないし2件が社員総会の承認を得て発足します。部会の設置期間は2年以内ですが、社員総会の承認が得られれば1年以内の延長が可能です。補助金は1部会につき年間10万円で、部会設置後1年を経過したとき過去1年間の部会の経過報告書及び会計報告書を、また設置期間が終了したとき経過ならびに成果に関する報告書及び会計報告書を社員総会に提出いただきます。また、部会の設置期間終了のときには、寄与した成果について本学会会報等に報告を掲載して広く会員に公表していただきます。

以下の要領で研究部会を公募いたしますので、

ふるってご応募ください。

・応募期日：2015年12月4日～2015年2月3日

・応募先：

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

公益財団法人 統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

応募書類の書式は学会ホームページよりダウンロードください。採否は3月に開催予定の社員総会にて審議の上、決定します。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については学会ホームページをご参照ください。

12. 修士論文の紹介

最近の修士論文を原稿到着順に紹介いたします。

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月の順に記載いたします。(敬称略)

修士論文

● (1) Chi-Hung Pan (2) 理学修士 (3) 国立中央大学 (台湾) (4) A copula-based parametric maximum likelihood estimation for dependently

left-truncated data (5) 江村剛志 (6) 2015年6月

● (1) Ai-Chun Chen (2) 理学修士 (3) 国立中央大学 (台湾) (4) A class of Liu-type estimators based on ridge regression under multicollinearity with an application to mixture experiments (5) 江村剛志 (6) 2015年6月

13. 新刊紹介

会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

・本橋永至著『Rで学ぶ統計データ分析』, オーム社, 2015年9月, 2600円+税

内容紹介: 経済・経営系の学部に在籍する大学生や企業において統計データ分析に携わる人を対象とした統計学の入門書。Rによるシミュレーションやマーケティングの仮想データの分析を通して、統計学を実践的に学ぶことができる。

14. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2015年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

(公財) 統計情報研究開発センター内

日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : shom@jss.gr.jp

現在の会員数 (2015年9月18日)

名誉会員	17名
正会員	1,420名
学生会員	60名
総計	1,497名
賛助会員	18法人
団体会員	7団体

15. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

・来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

・博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月 をお知らせください。

・求人案内 (教員公募など)

・研究集会案内

・新刊紹介

著者名、書名、出版社、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。

・会員活動紹介 (叙勲・受章、各種受賞等)

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

す.

原稿送付先：

〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学 総合情報学部 社会情報学科
森 裕一 宛

E-mail：koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL：
<http://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL：
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL：
<http://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス：
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス：
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス：
shom@jss.gr.jp